

「なんで私が、あんたと同じ系の仕事をしなきゃいけないのよ？」

放課後の人気のなくなった校内の一室で、ぶつくさと文句を言いながら書類の整理をしているこの女子生徒の名は、創美陵子。

この僕、獅童蓮斗の幼馴染だ。

よく揺れるツインテールと巨乳が人目を引く。

顔も可愛いのだが、昔からやたらとツンケンしている素直じゃない子だ。

「陵子が自分で選んだんだろ？」

僕はそう言いながら、彼女の側に運んだ書類を置く。

男として、重たい書類を運んでくる仕事は僕が一手に引き受けていて、彼女は書類の整理役だ。

なにぶん、僕は自身を書き換えることで身体能力をぐんと強化しているものだから、この程度の仕事は楽なもので、これですべて終わった。

「いつの間にか馬鹿力になったわね……」

陵子はそう呟くと、何故か少し頬を染めた。

「お、終わったなら、こっちの仕事も少しは手伝いなさいよ！」

「はいはい」

僕は苦笑しながら、彼女の前の席に座った。

とはいえ、仕事の手伝いは後回しだ。

(これでやっと、陵子で遊ぶ時間が取れるな)

今日はこの仕事があることだし、せっかくだからその後で同じ系の彼女を書き換えて遊ぼうと決めていたのだ。

僕は精神を集中させて、『存在の根源の世界』へ入っていった。



「ここが陵子の部屋かあ……。さすがに、年頃の女の子って感じだな」

目の前の扉を開けて陵子の『存在の部屋』に入った僕は、なかなか可愛らしい室内を見渡ししながら、そう独りごちる。

「さてと」

僕は室内を物色して、彼女に関する重要な情報が書き込まれたボードを見つけ出した。

それに、新しい定義を書き加えていく。

「創美陵子は、獅童蓮斗からあれをしろとかこれをするなとか指図されると反発する。その逆のことを、それがどんなことであっても必ずしてしまう」

「創美陵子は、獅童蓮斗に質問されたことには、それがどんな質問でも必ず正直に答える」

「陵子にはこのまま、正直だけど素直じゃない子のままでいてもらおうね」

僕はそう言って目を細めながら、元の世界へ戻った。



元の世界では、時間は経過していない。

僕は書類仕事を手伝いながら、何気なく陵子に話しかけた。

「ところで、陵子」

「なによ？」

「今はこうして二人きりなわけだけど、変な気分になったりしちゃだめだよ？」

そう、『指図』してやる。

すると……。

「何言ってるのよ、あんたの指図は受けないわ。変な気分になんて……、そんなの、なるに決まってるでしょ！」

目を吊り上げ、頬を染めながら、そう反発してきた。

僕は、内心でくっくっと笑みを押し殺す。

「ああ、そう。でも、いくら変な気分になっても、僕にキスとかしなきゃだめだからね？」

陵子は、ますます顔を赤くして、目を吊り上げる。

「うるさい！ 私に指図するな！ キスくらいするわよ、当たり前でしょうが！」

そう言って身を乗り出すと、荒っぽく僕の顔を掴んで、唇を合わせる。

しかし、それは一瞬のことだった。

すぐに飛び退いて、自分の口を手で押さえている。

「えっ！？ な、なんで？ どうして……」

戸惑いの声を上げる陵子を尻目に、僕は内心笑い転げそうになるのを堪える。

「そんなにキスしたがるだなんてね。もしかして陵子って、僕のことが好きなの

かな？」

今度は、そう『質問』した。

普段なら猛烈な勢いで否定するだろうが、書き換えられた今の彼女は、正直に答えるしかない。

「……う……うん……」

陵子は真っ赤になりながらも、こくりと小さく首肯した。

「へえ、そうなんだね。昔からそうだったの？」

「ち、違うわよ！ 昔は全然意識したことなかなかったわよ！」

陵子は慌てて、首を横に振る。

「じゃあ、いつから僕が好きになったのかな？」

僕はまた、『質問』をする。

「ち、中学に入って少し経ったくらいから……」

陵子は恥ずかしそうにもじもじしながら答えた。

「あ、あの頃から、あんたはなんだか急にたくましくなった感じで、気になり始めて……」

「ふうん、そっか……」

僕はにやりと笑った。

そして、さらに問いかける。

「ねえ、僕と付き合いたいの？」

「つ、付き合えるもんなら付き合いたいわよ！」

陵子は半ばヤケクソ気味に叫んだ。

それから、顔を真っ赤にして俯く。

「でも……、あんたはもう、理央と付き合ってるんでしょ……」

「ああ……。まあ、そんなもんかな？」

僕は苦笑しながら頷いた。

確かに、付き合っていると言えなくもないが。

実際には、理央は陵子よりも先に書き換えられて、今では僕の玩具になっているのだ。

普段は恋人っぽく振る舞うようにと、『設定』してあるだけに過ぎない。

「……そうだね。僕にはもう、恋人がいるわけだからね。陵子は、僕に二股かけさせるようなことをしちゃだめだよ？」

僕はくすくすと笑いながら、そう『指図』してやった。